

試験研究業務

(研究業務)

1. 指 導 部

- (1) 新製品の開発及び意匠改善研究
- (2) 竹材利用面の開発研究

1. 間伐材の利用研究

鎌田 正義

戦後の目ざましい拡大造林によって、我が国の森林における人工造林面積は、全森林面積約 2,500万htの35%に当る 900万htにまで達した。しかしこの人工林は戦後に植林されたものが多く、今後健全な森林を育て、国産材の供給を増大し、良質な木材を生産するためには、どうしても間伐を行う必要がある。

従来間伐材は主として建築現場の足場材やクイに使用されてきたのであるが、最近ではこれが金属製品に代替されるようになり、その需要が非常に少なくなっている。又、間伐材など小径木から挽いたタルキや根太、モヤ角などの製材品は木造住宅に必要な木材のうち20%程度は使われるといっているが、現在では安くて量のまとまる米材や北洋材にとって代られ、シェアが減少している状態である。

このように間伐の促進、内地材の需要開発は不利な状況下にあるのであって、間伐が進まず、量がまとまらないので自づと需要がないため、山林の間伐がいっそう進まないという悪条件を辿っているのである。この現状にあって、将来の我が国の木材資

源を考えると、国際的には、自国資源保護のウネリが強くなっている時だけに、眠れる資源、身近かな資源を生かすよう、間伐材などの小径木を見直してゆく必要があるのではなかろうかということから、その解決策の一助として間伐小径木をエグステリヤ製品としての開発研究を行った。今後は更に加工技術を検討し品質の向上を図り研究を継続する予定である。

2. 竹材製品利用の開発研究

小径孟宗竹は、あまり利用されておらず従来の竹製品としては歩止りが悪くコスト的にも高くなり、業界の中では敬遠されているのが現状であった。

ここでその利用を図るため、製品開発の計画をたて木工技術を併用することから袖垣、腰掛、ガーデンセットなどの試作研究を行った。最近では竹製品としての市場性が高く評価されるように見直をされてきているだけに今後関連企業との連携を強め特にエクステリヤ製品として研究を実施した。今後更に継続して行う計画である。

1. 編組竹製品の着色

大西 洋

従来の竹製品は、全般的に素地の自然色調が好まれてきているが、最近では染色製品も自然色製品と同等の市場性を確保しつつあるので、目的に応じて染色を行った染色法としては、色調の鮮明さと経済性を考慮し、染料を器物に応じて選択し、濃度と温度と時間の適正値を検討した。

染料は塩基性染料のビスマークブラウンメチルバイオレット、マラカイトグリーン